

近世では安芸国竹原塩田を対象に、それを運営する町役人・塩商人、さらには周辺農村との経済的連帯性を中心に、塩田都市文化の形態を研究しておられる。

がんらい、産業史の研究は生産機構、流通構造の究明にのみ終始し、それらの有する諸相を統合的に把握する作業をおろそかにする傾向が強かった。その反省として、同氏のおこなった社会・経済・文化の関連において一塩田地域を総合的に把握された究明は甚だ興味深いもので、これに対し贅意を表するものである。

渡辺則文氏の本著は、豊富な資料をもって手がたく打ちたてていった近年まれにみる好著であって、塩業史の研究者はもちろん、広く日本史の研究者に推奨したい論著といえる。

(A5判 三三三頁 一九七一年三月 三二書房 定価二八〇〇円)

(鳥取大学教授・)

谷川道雄著

『隋唐帝国形成史論』

気賀沢保規

五胡十六国時代とそれに続く北朝史は、胡族と漢族の相剋の過程から次の隋唐帝国の根幹を形づくる時代、として位置づけられる。しかし、この錯綜した歴史事象の内面に踏み込み、そこに展開される世界を統一的に把握することは、多くの困難に遭遇せざるを得ない。この困難な課題に精力的に取り組む、五胡・北朝史の研究に新たな地平を拓かれたのが谷川道雄氏であり、本書はその成果を一冊にまとめられたものである。一九五八年から六八年に至る十年間の氏の六朝貴族制社会に関する研究のうち、とくに政治史の領域を扱った十二編の論文が本書に載せられ、そこに新たに序説「隋唐帝国の本源について——中国中世の国家と共同体」が加えられて、氏の「共同体論」を知る上で最も注目すべき論稿となっている。本書には氏の貴族制に関する精神史的側面からの一連の研究は載録されていないが、政治過程の論及のうちにその精神史的課題が明らかにされ、抑えられた筆致のなかにも氏独自の

問題意識が漂っている。

本書について、すでに丹羽兎子・礪波護の両氏がふれ（史学雑誌一九七〇年の回顧と展望「魏晋南北朝」と「隋唐」の項）、また池田温氏の詳細な批判と紹介（東洋史研究三一―）をみているので、行論の都合上概要を述べるに止め、自分なりに全体を通じて表出する谷川氏の世界へ接近したい。とはいっても、氏の提出される問題は多岐にわたり内容も豊富で、また筆者自身十分な知識もなく、どれだけ理解できるか心もとなない状態であるが、叱責を恐れず与えられた機会を生かすつもりである。

当初、唐代史研究に数々のすぐれた業績を残された谷川氏が、中途から北朝史の領域へと逆行していったのは、主に「隋唐帝国」という時代をどう理解するか」という問題意識に因って、その原基形態を探ろうとしたからである。さらにその範囲を五胡十六国時代にまで押広げたのは、この時代を「秦漢帝国のひとつの帰結を示すものであり、したがってまた、つぎの大帝国の時代、すなわち隋唐帝国への起点をなすもの」と把握したからに他ならない。第1編「古代世界帝国の崩壊と五胡諸国家の興立」では、その立場から、中原の地に国家を形成した匈奴系の兩趙・鮮卑慕容部の前燕（後燕）・氐族の前秦といった諸国家の構造を追求する。

漢帝国を崩壊させた要因は、第一義的には豪族勢力の抬頭―貴

族制社会の出現のなかに求められるが、もうひとつは、漢帝国の支配下に包摂され漢人と雑居状態に置かれた異民族の自立化の動きにあった。この異民族問題は、オルドス方面から南下して山西汾水流域に集住していた南匈奴が、四世紀初頭劉淵を擁して自立したことを俟って、顕在化する。漢帝国の崩壊は、同時に一元的支配の体制から多極的世界への移行を意味するのである。

五胡諸族の興起の先頭をきった南匈奴は、後漢・魏晋の支配の過程で、「匈奴人民衆をしてその自由身分を転落して奴隸・田客化せしめた」身分的低落の境遇と、単于の地位の形骸化とをもたらし、「その固有な生活を解体させられ、種族としての自立性を喪失せしめられた状態」に追込まれていた。それゆえ、劉淵を介して噴出する運動は、種族の自立性喪失状態の克服、すなわち「貴族と民衆との相互結合を保証するところの遊牧社会の自由体制」の原理に依拠する匈奴的世界の復興に向うのである。この自立性回復の行動は、中原社会そのものに立脚して進められ、それを通じて漢的世界帝国の否定が実現する。同時に劉淵が匈奴部落の困窮を救済すべく期待され、現実社会の新しい指導者として出現する自立化の具体的形態は、漢族の鄉村社会から出現する豪族のあり方と共通性をもち、そのことが胡漢兩世界の統合の方向を示している。

華北に成立した胡族諸国家は、皇帝権を媒介にして一つにまと

められる胡漢二重体制を採用した。だがそれらの国家構造に共通

してみられる現象は、「皇帝権の著しい不安定さ」である。軍事

に依存しなければならなかった胡族国家は、胡族民衆からなる軍

事力を宗室諸王の手に委ねたが、その結果皇帝権は強大な兵力を

掌握する宗室の存在によって独裁化を抑制されたからである。こ

の権力の多元性の姿に、遊牧社会の部族連合国家の継承が窺われ

るのであり、あたかも軍事的封建制の様相を呈する。宗室的軍事

封建制を基礎にして成立し公的に機能する皇帝権のあり方に、

「単于と遊牧自由民との連帯関係」という理念の投影をみること

ができるが、しかし、中国の富を前にして連帯関係はもうくも崩

れ、帝室内部の深刻な権力闘争をもたらすのである。それは、一

方では皇帝権によるタテの関係の強化―皇太子への国政委任・後

宮の拡張・宦官外戚の政治介入・莫大な奢侈と浪費―の方向を生

み、また他方では諸王による威権の拡張となり、帝室内の不和と

頽廢をひきおこす。五胡諸国家の構造的限界、すなわち権力の私

権化を容易にした理由は、宗室という血縁共同体を基盤にし種族

主義を政治体制に持込んだことによる抵抗力の弱さに求められる。

五胡時代の最盛期を画する前秦苻堅にあっては、徳治主義に立脚

評

する統一を志向しながら、種族血縁主義の壁を越えることができ

ず瓦解を余儀なくされた。

だが、遊牧社会の理念に依拠して成立した胡族国家は、そこに

権力の「公共性」の側面を現わすのであり、民衆世界に生きてい

た士大夫層は、漢人王朝の浮華的風潮を見棄て異民族王朝のもつ

公共性に期待を寄せた。かれらは、公共的性格を有する皇帝権の

確立を望み、権力の私権化への傾斜に対して、命を賭してまで抵

抗を試みたのである。結局は種族のワクを打破れず、私権化の動

きによって排除されたが、ここにみられる士大夫層の意識に、の

ちの賢才主義の原型が存在している。

異民族王朝が真に中国社会に成立し得るには、胡漢相互の人格

主義的合体と、それを基盤にして公共世界の中心となる皇帝権の

確立とを待たなければならぬ。第Ⅱ編「北魏統一帝國の支配構

造と貴族制社会」においては、右の課題を解決する前半部分に位

置し、北魏の成立から北魏末の内乱に至る過程が問題とされる。

五胡国家の限界性を示した種族主義は、北魏では、四世紀末道

武帝が部落解散を断行し八国(部)に統合したことにより、一応

乗り越えられた。太武帝に至って華北全域の平定が実現するが、こ

の段階では「北族的要素を濃厚にもつ軍事体制」に支えられ、胡

族兵士が各地の鎮戍に分散して置かれており、部族連合国家の影

響から抜け切っていない。崔浩の国史事件の如く、漢人士大夫層

もまた受身の形で参加しているのである。

拓跋国家のこのような性格は、孝文帝の漢化政策によって転換される。それは「胡族国家から中国的普通国家への転身」であり、官制改革を通じて貴族制社会の成立へと進む。人格的資質に価値基準を求める貴族主義は、種族主義からより普遍的地平への移行を意味する。孝文帝はその体制の維持のため、北人内部の身分秩序の制定と漢族社会内部の門閥関係の整備という氏族評定を實行した。孝文帝による門閥主義政策採用の意義は、「中国社会の伝統的門閥主義と北族社会の素朴単純な旧習とのギャップを、政治的に埋め」、北族勢力に階級制度を注入して統一力の維持をはかったことである。

それに対して、漢人士大夫の賢才主義者による反発をひき起こした。かれらは、旧門閥勢力とちがって王朝権力と深い関係のもとに出現した士人層が主体で、権力の公共性達成のために、門閥制度による閉鎖性を打破し、士大夫内の賢才に解放された体制の確立を主張したのである。この主張は孝文帝に承認されなかったが、次の北周―隋の体制下で現実化し、科挙制度の理念に受け継がれる。

門閥主義的再編成は、必然的に士人と非士人の区別を明確にする。その結果、北魏の華北統一に主要な役割を果たした北族出身の

軍人は、榮達を抑えられ排除されていく。榮光ある地位から転落するに際して、門閥体制への反発として最初に激発したのが羽林兵の暴動であり、次に北鎮の乱となって現われ、華北全域の内乱へと進む。六鎮に配属・定住させられた北方系軍士は、「本来自由で国家の榮光をになった軍士」であり、仕官の道も開け様々な特権が与えられていた。だが門閥国家への転身にもなって、体制から疎外され身分的分断をうけ、北魏末には軍籍付属の賤民化した地位（府戸）を余儀なくされたのである。北鎮の乱を契機に、華北各地に活動する城民（城人）＝鎮城所属の民も、州郡民とは区別され軍籍に置かれた北族系兵士であった。それゆえ、北鎮の乱と続く城民の反乱は、「自由民から賤民へ」という歴史的状况、および賤民から自由民へ、という志向と行動」として措定できる。孝文帝の門閥主義政策は、種族性を脱却して中国的普通国家への志向を具体化したのであるが、究極においてその種族性を克服できなかったのである。

北魏末の内乱の過程で明らかとなった賤民から自由民へという課題は、次の時代にどのように解決されていくのであろうか。それは同時に、種族性を克服し門閥体制を否定する方向において実現されなければならない。第三編「北朝後期における新旧貴族制の抗争」は、その問題に主眼をおいて展開される。氏は全体とし

て「東魏」北齊についてはその挫折を、しかし西魏「北周」についてはこの方向の定着を」とする展望のもとに臨んでいる。

北魏末の内乱のなかから新たな勢力として出現したのは、地方豪族とそれの統率する郷兵集団であった。郷帥と郷兵との関係は、賤民化の契機を内包させた門閥主義体制下の官兵とはちがって、自発性と相互信頼による自由な空気がみられる。郷帥は多く地方の貴族層出身であるが、豪俠的性格を備え郷党社会と密接に関係していた。郷党を遊離して門閥体制に組込まれた貴族層が頽廢への道をたどるのに対し、郷党を背景に現われる豪俠的貴族は、貴族階級の危機を克服すべく自ら郷兵を結集し、高歡・宇文泰に結びついたのである。郷兵集団に流れる門閥主義を打破し水平化を求めると、北族にみられる自由民への志向との共通性が、両勢力の合体を可能にした。

門閥主義体制から生まれた頽廢が、北魏末の内乱と郷兵集団の出現を促し、この二つの勢力が東魏「北齊」と西魏「北周」の政権を構成する軸となる。しかし前者の世界は、政権の成立を助けた勳貴勢力と北魏以来の漢人門閥貴族との葛藤が続き、ついには暗君と恩倖による腐敗のなかで滅びた。この政権を荒廢させた原因は、主要には門閥勢力が士大夫的矜持を棄て、帝権に依存することによって指導権を獲得し、勳貴勢力の弾圧に進んだことにあるが、

一方勳貴勢力側も、自らの立場を政治体制に定着させる努力を怠ったことが指摘できる。初期に高歡に採用された賢才主義も、門閥貴族の拾頭・勳貴の後退・寒門勢力の出現のなかで挫折を余儀なくされるのである。

一方、西魏「北周」にあつて、北魏末に現われた北族・漢族の勢力は、宇文泰の下で二十四軍の軍団に編成され、その勢力の指導層は二十四軍を分統する勳貴集団を構成するに至る。この勳貴集団は内部的に相互に規制・支持しあう関係をとるとともに、それ総体として一定の自立性を保ち、政権を二重状態に置くのである。勳貴集団のこのようなあり方に正当性を与えるために設立されたのが周礼的体制である。この分権状態を前提としつつ統一性を保とうとする体制は、五胡の国家構造にみられた宗室による分権的体制と共通性をもつのであり、両者の権力構造の共通性が具体的に「天王」の称号として表現されるのである。しかし、権力構造上の共通性にもかかわらず、五胡国家ではそれが宗室という血縁的關係で支えられたのに対し、北周では血縁的秩序原理を越え異姓との関係へと一歩踏み出している。

北魏門閥体制下で認められなかった賢才主義は、同じく門閥体制の否定の過程で生まれた西魏「北周」において採用されるに至った。それは、勳貴勢力を中心とする士人層の行動理念となり、新

貴族制の成立を促した。そこで胡漢兩勢力は種族の限界を越えて主体的に参加することが可能になったのである。新貴族勢力の抬頭の前に、門閥勢力は後退を余儀なくされ、帝権に依託することによって始めて地位が確保できた。周隋革命に暗躍した鄭訳・劉昉ら漢人貴族の行動に、類靡の典型的姿態を見出すことができる。

北周に替って成立した隋朝では、高頌に代表される一群の官僚が活躍し始める。かれらにみられる文武兩兼の人格・豪俠性・職務に対する忠実さや実務性・民衆と遊離しない、生活感情等々の共通性が、開皇期の政治を特色づけた。高頌の官僚としてのあり方に、「本来旧貴族を成りたせていた士大夫精神が、あたらしい形態において生かされた、新時代の官人像」、すなわち西魏||北周体制に生成した新貴族主義の結実の姿、をみる事ができるのであり、次に成立する唐帝国に受け継がれるのである。

以上、本書の概要の紹介を試みてきたが、平板な理解に終り、谷川氏の意図を完全に汲取っていないことを恐れる。重厚な論理構造と緻密な実証のもとに構成された本書は、歴史認識に現われたナイーブさと情熱という氏自身の個性と相俟って、従来みられなかった新たな歴史書としての態をなし、われわれに限りない魅力を与えるとともに、これからの歴史研究のひとつの方向を提示している。氏の背景には内藤湖南以来の学問的伝統の存在が知ら

れるのであるが、そこに依拠しつつも氏独自の地位を確立するに至ったのは、国民的歴史学の運動とそれを継承した人々との間で展開された中国国家論に関する論争を通じてである。この論争のうち、氏の最も問題とした点は、「諸制度の根源にある人間の意志」を如何に歴史の舞台に蘇生させるか、にあるように思われる。国家||制度を民衆に対する支配抑圧の機構と理解し、兩者の対立を生産関係で没入間的に把握する階級史観に対し、氏は国家と民衆との間の相互に意識し結合しようとする面を重視する。兩者が互いに支え合う緊張関係の上に国家は成立するのであり、階級性を前面に押し出し兩者の関係を破壊させることによって、その国家は否定されるのである。この階級関係を包摂した共同体的結合を軸に据え、中国史の独自の且つ生き生きとした發展形態を追求しようとしたのが、谷川氏の「共同体論」であり、本書はその具体的成果である。

隋唐帝国の本源を明らかにするために進められた五胡・北朝史の研究で、氏は「胡漢民衆の自由への志向」を主軸として全体の流れを跡づける。具体的には権力の公的性格（公共性）がどのよう_にに確立されていくのか、に視点をあてている。ここで問題とされる「自由」とは、漢人社会の郷党共同体と遊牧社会の部族共同体に貫徹する理念であり、この胡漢兩共同体が華北の場において

相互に関与し、最後に両者の主体的合体のもとに新たな国家共同体、すなわち隋唐帝国を創出せしめるのである。胡漢民衆はそこで自由民として国家と結合する可能性を与えられた。

隋唐帝国の原点たる胡漢両共同体が、『中国中世史』の「総論」で示された「豪族共同体」にあたるが、では何故にこの共同体における自由が問題にされなければならないのか。自立小農民によって編成された「里共同体」が、内部から生まれる階級分化の前に崩壊し、次に大土地所有者と小農民との鋭い階級対立を越えて再編されたのが「豪族共同体」であると想定する場合、そこでの指導者が共同体倫理の体得・実現者たる士大夫であろうとも、民衆の側においては、疎外状況が一步進められたことにならないであろうか。谷川氏が貴族のもつ倫理性を執拗なまでに追求される背景には、このことを意識するからだと思われるが、それにもかかわらず、自由の本源を共同体に求めるとき、何故に里共同体ではなく豪族共同体を定置するのかという疑問が残り続ける。胡族民衆が漢族世界へ合流していくにあたり、その古代性の標徴たる部族共同体が想起されるように、漢族民衆にあっても里共同体が前提にされてもよいはずである。

中国史の巨大な流れを、共同体社会とそれを支える自由の理念を軸にして、統一的に把握しようとする作業は、多くの困難をと

もなうとともに、一方では生き生きした歴史像を浮彫りにするだろう。西魏―北周の胡漢合作政権のもとで成立した新貴族官僚集団が、次の隋朝開皇期において政治を主導する勢力として現われ、そこに国家共同体の一応の実現がある、と位置づけられた谷川氏は、唐帝国に対しさらに完成された姿を期待している。この場合は、唐帝国に介在する諸反乱の意味をどのように理解したらよいのであろうか。換言すれば、新貴族制の上に確立した隋朝が、何故に短期間のうちに崩壊への道を突き進まなければならなかったのだろうか。煬帝の暴政に加担したのは、「選曹の七貴」と総称される旧門閥貴族の濃厚な勢力であるが、だからといって、

この時期を文帝期の政治とは異質なものと想定することは早計だと思ふ。むしろ煬帝期にみられる政治の出現を可能にする要因が、新貴族主義体制の内部に隠されていたと考えられる。郷党共同体の同心円的な拡張の結果もたらされる国家共同体とは、民衆の自由への志向を現実化し自由民的地位を保証したと捉えられる半面、それを不断に規制し変革させるエネルギーとその力を生み出す場を喪失してしまう危険性を有する。北周―隋の体制と緊密な関係を形成した郷村社会が、それ自身のもつ自律的な活動を抑制されたことにより、煬帝の暴政を到来させたのでないだろうか。逆に谷川氏が自由への志向の挫折形態として理解する東魏―北齊では、

動搖を続ける政治体制のもとで、李士謙に代表される士大夫的大土地所有制を發展させ、その下で郷村の自律性が維持されているのである。隋末の諸反乱は、煬帝に対する反抗であるとともに、郷村の自律性回復を志向する運動としての側面をみせるように思われる。それゆえ、新貴族主義体制は胡漢両共同体の帰結を意味すると同時に、ただちに形骸化の方向に進み出す、としての考察も必要となるのではないだろうか。

谷川氏が貴族社会の倫理性を重視する姿勢には、中国史の階級対立を知識の所有の問題において把握する意識と関連していると思う。文化の所有者と非所有者の対立、この関係が現在に至るまで続くのであるが、それを規定するのは生産関係に求められねばならず、精神的領域の解明にあたり、社会経済史との相互補充が避けられない課題となる。このほか、北魏の果した役割に関し、氏は余りにも否定的評価で終っているように思われるが、それでよいだろうかという点、高歡と河北貴族勢力との結合を可能にした理由、など二・三のもの足らなさを感じたが、それらは有機的接合の上に立つ本書において瑣末なことである。

以上、浅学の身も願みず思いつくまま書きつらね、谷川氏の真意にどれだけ迫り得たか心配である。だが、氏が明らかにされた民衆の内面世界の豊かさは、古代世界を超越したところに現われ

る中世的精神として、強い共感を覚えた。氏が提起された「自由」の理念は、われわれが今後の歴史研究で正面から取組み、一層実質化しなければならないものである。

(A5判 三六四頁 地図二葉 昭和四六年十月 筑摩書房刊 定価 三四〇〇円)

(京都大学大学院生)